

発行
北海道ポーランド文化協会

〒060-0018
札幌市中央区北18条
西15丁目3-19 安藤方
電話・FAX 011-556-8834
hokkaidopolandca@gmail.com

POLE

第98号 2019.9.5
北海道ポーランド文化協会 会誌

北海道ポーランド文化協会
東京事務所

〒107-0052
東京都港区赤坂
9-6-29-309
音響計画(株) 霜田気付
電話 03-6804-1058
FAX 03-6804-6058

国指定
重要文化財

豊平館で第33回定例総会・懇親会



10/12 (土) 豊平館 (中島公園内) 15:30～ 総会 1F 下の広間 / 17:30～ 懇親会 2F 広間

写真は今年の懇親会の様子です。

総会 1F 下の広間

入館には観覧券が必要です。1階事務室(受付)前でポ文協の係の者が手渡します。

懇親会 2F 広間

開場17時、その前に来て館内を見学する場合は観覧料 300 円が必要です。

昨年同様、国指定重要文化財・豊平館で総会と懇親会を催します。1階「下の広間」で総会のあと、2階「広間」で恒例の懇親会を行います。明治の「文明開化」を彷彿とさせる華麗なインテリアの異次元空間でのパーティーです。

参加費は無料、参加者各自が食べ物または飲み物を持参し、みなで分かち合うポットラック式の手作りパーティーです。手作りケーキからコンビニのお握りまで何でも結構です。会員以外の方も歓迎です。

会場のピアノを使って、歌、演奏、合唱、ダンスなど、ポーランドと日本に関係した楽しいパフォーマンス

も計画しています。19時30分ごろ「中締め」、片付けのあと、歓談の続きや飛び入りのパフォーマンスのための時間をとります。晩秋の豊平館を心ゆくまでお楽しみください。

ポーランドと日本を中心に、国境を越えた国際的な文化交流の場となることを期待しています。

みなさまのご協力をお願いします。(小笠原正明)

【予約必要:参加申し込み方法】

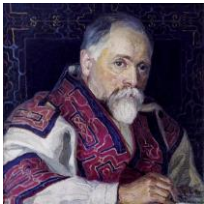
- ① 返信はがき(会員むけに同封)
- ② hokkaidopolandca@gmail.com
- ③ 090-2695-3880(小林)

どなたも参加無料
ポットラック式パーティー
(一品持ち寄り)

参加者は食べ物・飲み物を一人分より多少多めに持参し、用意したテーブルに並べてみなさんに提供します。

(例)ケーキ、クッキー、サンドイッチ、ピザ、サラダ、お寿司、海苔巻き、ビール、ワイン(栓抜きつき)、お酒など。なお、多少のソフトドリンクとオードブルは協会でも用意します。

パーティーのあと、後片付け、ゴミの持ち帰りにご協力ください。



〈後援〉平取町立二風谷アイヌ文化博物館 第25回特別展

1903年夏の平取

～B・ピウスツキたちの短期調査より～

日時:2019年10月1日(火)～12月1日(日)9:00～
16:30 *休館日:11/18(月)、11/25(月)

会場:平取町立二風谷アイヌ文化博物館伝承サロン
(北海道沙流郡平取町字二風谷 55)

後援:ポーランド広報文化センター、本協会

入館料:大人 400 円、小・中学生 150 円(町民は無料)

1903(明治36)年7月上旬～9月19日、ロシア帝室地理協会の委嘱による調査団(プロニスワフ・ピウスツキら3名)が北海道アイヌの調査を行いました。約一週間にわたり滞在した平取コタンでは、地域の撮影や聞き取りを行ったほか、多くのアイヌ民具やアイヌ語音声を集めています。

本展示ではこれら貴重な成果と合わせて、地域住民との出会いや交流を紹介し、明治後半代の平取の姿を来館者と共有します。

また、2018年にはポーランドのジョルイ市博物館とクラクフの日本美術技術博物館“マンガ”館でB・ピウスツキに関する展示会が開催され、本館が協力しました。そうした近年の国際交流の動向も紹介し、ピウスツキが没後100年にもたらした縁と今後にかさすべき教訓を考える機会にもします。



関連イベント

①シシリムカ文化大学講座「ピウスツキのロウ管～アイヌ語音声の再生と活用」伊福部達氏(東京大学名誉教授:社会福祉工学)ふれあいセンターびらとり、10月15日(火)18:30～21:00

②シシリムカ文化大学講座「1910年日英博覧会における沙流アイヌとピウスツキ」宮武公夫氏(北海道大学名誉教授:文化人類学)ふれあいセンターびらとり、10月24日(木)18:30～21:00

③平取町立二風谷アイヌ文化博物館 講演と映画のつどい「1903年夏の平取～B・ピウスツキたちの短期調査より」井上紘一氏(北海道大学名誉教授:文化人類学)&ドキュメンタリー映画『Ainu | ひと』上映、沙流川歴史館レクチャーホール、11月17日(日)13:00～16:30

※参加無料、事前申し込み必要(二風谷アイヌ文化博物館 ☎01457-2-2892)、申込期限①10月4日(金)②10月11日(金)③11月8日(金)

(長田佳宏、平取町立二風谷アイヌ文化博物館学芸員)
写真右上:マンガ館一行の二風谷博物館訪問(2017.2)

〈後援〉 〈講演と報告の集い〉

子どもの権利条約採択30周年 によせて～日本とポーランド～

日時:2019年11月14日(木)16:30～19:00

会場:札幌学院大学新館 B101、主催:札幌学院大学
後援/協力:日本ヤヌシュ・コルチャック協会、ポーランド

広報文化センター、子どもの権利条約総合研究所
北海道事務所、東海大学ほか

今年は子どもの権利条約採択30周年という世界の子どもの歴史の一つの画期といえる年で、国内外で子どもの権利条約の意義を検証する試みが行われています。我が国では、国連の子どもの権利委員会による第4・5回目の最終所見をうけて、子どもの権利条約と子どもの権利擁護の現状と課題について検証が求められています。

本企画では、子どもの権利条約の提唱国であるポーランドから前ワルシャワ大学教授 W・タイス先生を迎え、講演・報告・質疑を通じて子どもの権利に関する施策とその実効性について考えます。

タイス先生には、子どもの権利条約の思想的背景となった J・コルチャックの子どもの権利思想と、現代ポーランドにおける子どもオンブズマン制度について講演いただく予定です。報告では、ポーランド国立特殊教育大学 M・シヴィツキ准教授(メディア教育学)から、コルチャックの著作が書かれたポーランドの時代背景と現代のオンブズマンのメディア利用について、また日本からは、子どもの権利条約を数多くもつ北海道の現状について報告を受けたいと、質疑を行います。

講演会を通して我が国の子どもの権利擁護の仕組みや施策に関して現状と課題を検討し、この機会に道内の子どもの権利に関する関係者のネットワークが広がり、さまざまな実践現場で子どもの権利擁護に関する共同研究が進む契機となることを期待します。

(塚本智宏、東海大学札幌キャンパス教授・本会会員)
※入場無料、お問い合わせ(塚本)011-571-5111
(大学代表)、2018tsuka@gmail.com



《第 91 回例会》ポーランド名画ビデオ鑑賞会 2019-2 『カティンの森』

札幌エルプラザ 4F 大研修室、2019 年 7 月 3 日（水）



[報告]『カティンの森』鑑賞会には、約 35 名(非会員約 20 名)が参加されました。上映に先立ち会員の三浦洋・北海道情報大学教授(右下写真左)から 10 分ほど作品解説をしていただきました。

三浦さんは、この作品が最初から最後までシリアスで息抜きのない悲劇を描いており、アンジェイ・ワイダ監督が 80 歳にしてようやく犠牲者となった父への追悼の思いを込めて完成させた歴史的な作品であり、最後の虐殺シーンなど、どんなに悲しい場面でも感情的・抒情的には描かない、ワイダらしい表現が貫かれていることなど、本作品の背景や特徴をわかりやすく解説されました。

上映終了後、お茶をいただきながら懇談の場を持ちました。息が詰まるような作品を見た直後で参加者もしばらく声が出ない様子でしたが、アンケートには率直な感想をたくさん書いていただきましたのでご紹介します。(司会 園部真幸=右上写真=)

[アンケート] 回収数 10(自由記述)

・ 1)もっとドラマチックにも作れるのに抑えた表現。それが強い説得力を持って伝わってきました。強い悲しみと怒りが。

2)ハンナ・アーレントの言葉をずっと考えていました。映画を見ながら。代表作『人間の条件』で彼女は labor(労働)<work(仕事・制作)<action(行動)でなければならないと書きます。labor は生活のためだけに働くこと、マルクス主義やナチス(国家社会主義ドイツ労働者党)の問題は labor を一番上に置いたこと。そこには必ず指導者層ができます。それはやがて独裁者を生みます(*)。考えない人間を多数作り出します。その最たるものがアイヒマンのような人間。work とは独創性、永続性のある仕事、それを人々のために生かしていく(action)。そこにしか『人間の条件』はないのでしょうか。(※『動物農場』(ジョージ・オーウェル)でも「すべての動物は平等である。しかし、ある動物はもっと平等である」と書かれています。)映画の中に「思うだけでは何の意味もない」という言葉がありました。それが action なのでしょう。(池田光良)

・ 押しつぶされた様に感じました。圧巻です。ポーランドの奥深い歴史の一コマです。

・ 事件のことは知っていた。ソ連の支配下にあった時代に Poland 人が沈黙を続けたこともわかる。ソ連に反抗した人が殺されるだけなら理解できるけど、そうでもなかったのかわからない。三浦先生のお話は面白く興味深かった。時間があればもっと聞きた

かった。

- ・ こんな映画ははじめてみました。戦争はおろかなことと知っていても、人間はなんとおろかなことをしてしまうのでしょう。いのちの大切さ、おろかな人間について考えずにいられません。日本の子どもにみせたい。戦争はいけないと口だけで言うより映画で伝わるものがある、と思いました。
- ・ 戦争の悲惨さを改めて考えさせられました。今現在でも何処でも戦争がありますが、絶対に戦争はしてはならないと痛感します。素晴らしい映画でした。
- ・ 国家というものは恐ろしいとつくづく思います。何でも出来るし極めて残酷なことも平気で出来る人間を作ることも出来る。最後のブルドーザーが土をかける場面は沖縄の土砂投入の場面と重なりました。何度見ても重くやり切れない気持ちになります。いい映画ですね。(70 代女性)
- ・ 歴史の証人として「カティンの森」という映画を監督したアンジェイ・ワイダは凄いと思った。ちょっと気持ちが悪くなったが… 母のすぐ下の弟も戦死した。沖縄のガマで遺骨は残されていない。1 個の石だけだったそうだ。
- ・ 70 年代に出会ったポーランド人は皆真実を知っていた。ソ連が初めて認めたのはフルンチョフだったか。体制が嘘をつくの肯じえない。人々の怒りと悲しみ。ワイダの慟哭…!! 予想よりも難解な作品。
- ・ とてもよかった。以前見のがして残念に思っていた。戦争中に起こったことは知られていない事実がたくさんあるのだ、とあらためて思いました。ありすぎて若い時には多分受けとめることができなかつただろうと思う。導入部分で橋の上で、クラクフからの人々とクラクフに向かう人々が鉢合わせになるところ、はじめからショックでした。又「ブリキの太鼓」という映画を思い出したり、「消えた子供たち」(?)という映画を思い出したり、恐ろしい。
- ・ 「カティンの森」を観るのは 2 度目ですが、やはり映画は同じ作品を 2 度 3 度と観て、ようやく理解できます。これからも良質な作品の上映を宜しくお願い致します。それにしても当時のポーランドの国状には涙を禁じえない。現状の日本の国防は？国防は日本国憲法に反するの？



《第90回例会》第9回朗読と交流の会「午後のポエジア」～私のポーランド～
北大クラーク会館 3F 大集会室 2、2019年6月1日（土）

「午後のポエジア」に参加して

嵩 文彦

実に楽しく意義深い午後でした。そのなかで特に印象深かったことを書いておきます。

ピアニストの徳田貴子さんが「どこか懐かしいポーランド音楽」というタイトルでお話と演奏をされました。私が一番びっくりしたのは、ショパンが日本人に愛好されるのは、彼の音楽はほかのヨーロッパ音楽と違って、アウフタクト（弱起）がなく、1拍目からいきなり主題にはいるからで、それは日本の民謡とおなじ構造だという説明でした。普段は全く日本の民謡は聴かないのですが、納得させられました。

ショパンはよく「ピアノの詩人」と言われますが、それは「愛や恋を美しく語る叙情詩人」という意味のようです。私がまだ大学生だった頃、喫茶店で友人とショパンの音楽についておしゃべりをしていたら、近くの席の男から軽侮の眼差しを受けました。

戦前の芥川賞受賞作家に多田裕計という俳人・小説家がおりました。彼の著作に『草萌えにショパンの雨滴打ち来る』という俳句・随想・詩・短篇小说からなる本がありますが、この本の題名は前奏曲「雨だれ」の穏やかな前半を思い浮かばせても、後半の激しい暴風雨は「打ち来る」という強い動詞があっても、イメージさせずに終わるのではないのでしょうか。それは「草萌え」という春の季語があまりにも穏やかで暖かだからです。

この日、長屋のり子さんは「Mrs. M の語ったショパン」という題のもとでも良い自作詩を朗読されました。不幸にも離婚して孤独感にさいなまれる夜、ドライブの途中で聴いたショパンによって「生きる意思が冴え冴え燃え」はじめる友人 M の物語です。



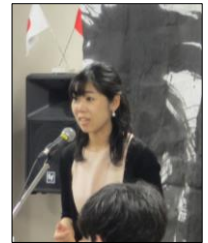
「その時に流れ出した曲がショパンだった。／「革命のエチュード」だった。／アルゲリッチだったか、リパッチイだったか、／いずれにしてもピアニストの指に翼が生えたような／鋭い凄い打鍵だった。／音楽のもつあらゆるアスペクトが有機的に／叩き出されて私に迫った。／あれは一瞬のうちに私が音楽と一体になる／奇跡の瞬間だった。／ショパンが力強い響きを立てて私を歓喜として襲った。」

ショパンには大国に虐げられてきた祖国の歴史の重層があります。結核で早逝しましたが、私たちに励まし続けています。 (だけ・ふみひこ)

どこか懐かしいポーランド音楽

徳田 貴子

日本とポーランドの共通点として、「故郷」に対する思いが似ていると感じます。10年間アメリカで外国人として生活した経験から、ポーランド、日本、アメリカにおける「故郷」の概念の違いを認識するようになりました。



私はアメリカにいた時、個人として自分が他の人とどう違うのか、自分にはどのような理由で他と違った意見があるのかということ強く意識させられました。アメリカでは小さい頃から、他の人と違うところを個性として伸ばします。一人の人間として自分を認識し、自分の夢を実現することがアメリカ社会の成功、幸せなのだと感じました。

一方、日本では論理だけでなく、感情を読み取り、表現することが常に大切にされます。気遣いや細やかな言葉遣い、習慣の中にそれが息づいているように思えます。そこから、自分だけでなく周りの人との気持ちの共感性の中に幸せをより多く見出そうとしているのではないかと感じます。

私はアメリカにいた時、一人ひとりが家族の概念をどうに超越して、一人ひとりを「個」として扱っていることに非常に衝撃を受けました。戻ってくるホームという概念が日本に比べて希薄なのではと感じたのです。私が日本に帰国しようと思った大きな理由の一つは、故郷の、自分が育った環境、歴史、文化の中で生活することで得られる安心感が、代えがたい幸福感につながると確信していたからです。

ショパンはパリにいながら、ナショナリズムの流れの中、ポーランドの踊りのリズムや民謡を引用し、故郷を感じさせる音楽を作曲しつづけました。アメリカにいた時、特にショパンの音楽を聴いて、私の思い出の中の日本が自然と思い出されることが何度もありました。ポーランドの音楽を聴いて、自然と「郷愁」という概念を感じ、暖かく懐かしい、そして幸福な気持ちになりました。日本という国で生まれ育ち、故郷にいて感じられる幸福感を知っているからこそ、私は同じ暖かさを持つポーランド音楽に惹かれるのではないかと思います。私が感じた故郷の暖かさを、演奏を通じてさらに多くの方と分かち合いたいと改めて思います。 (とくだ・たかこ)

私とポロネーズ

坂田 朋優

小さなころからショパンの音楽が好きだった私が、ポーランドの先生に初めてレッスンを受けたのは大学4年の終わりでした。大学の客員教授として2年間日本に滞在していたハリーナ・チェルニー＝ステファンスカ先生が任期を終える前に、所属のクラスに関係なく、希望者にはレッスンをしていただけることになったのです。私はすぐに希望を出して数回のレッスンを受けることができ、それ以外もできる限り多くのレッスンを聴講しました。

帰国される前には学生たちとのお別れ会が開かれ、最後にみんなで踊ったのがポロネーズでした。長老から踊るという習慣にならって先生方からペアで踊り始められたのが印象的でした。日本人ばかりで、本来の踊りとは少し違ったかもしれませんが、雰囲気に触れることができただけでも貴重な体験

「午後のポエジア」の風景から



であったと思います。

ポロネーズは、ホゾーニ(chodzony)という農民の間で踊られた舞踊に関係していると説明されることも多く、ホゾーニはポーランド語の chodzić(歩く)という言葉に由来しています。ポロネーズというと、ショパンの「軍隊ポロネーズ」のような堂々とした威厳や誇りを示すものとイメージする方も多いと思いますが、感傷的なメロディーで書かれたポロネーズもあります。それを代表するのが、ミハウ・クレオファス・オギンスキの「祖国よ、さらば Pożegnanie Ojczyzny」で、作曲されたのは第二次分割後の1794年でした。華やかなポロネーズと感傷的なポロネーズは一見すると対照的でも、そのどちらにも祖国を思う気持ち、愛国的精神といったものが込められているのに変わりはないと思います。

今回「午後のポエジア」で演奏したのは、アンジェイ・ワイダ監督の映画『パン・タデウシュ物語』で使われていたヴォイチェフ・キラル作曲のポロネーズ(ピアノ編曲版)です。初めてこの映画を見た時から、その旋律が忘れられず、いつか弾いてみたいと思っていた作品でした。(さかた・ともまさ)



①「森へ行きましょう Szła dziewczeczka」②トゥヴィム「おおきなかぶ Rzepka」③同「一、二の、三 Raz, Dwa, Trzy」
(参考 ブログ記事)【WEB 検索】空への軌跡・吟遊記 第90回例会午後のポエジア



ポーランド&ニッポン歳時記 30



実りの年

今年、向かいのアカシアの枝によく二羽の鳩が飛んできます。その梢に届きそうな我が家のベランダで、以前二匹の雛が巣立っていったのを思い出します。自分の人生の果実を見られるのは素敵なことです。

gałąź akacji

アカシアに

znów chyba są u siebie

また二羽鳩の

te dwa grzywacze

里帰り

Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

za oknem słońce

レポートの

na biurku usypiają

山と居眠り

prace studentów

陽は外に

Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

夏雲や泣く子わめく子稚児の列
薔薇の名はマリーアントワネットかな
さまざまに夏花のはしやぐ雨きたる

岩見沢市、霜田千代麿

《新会員のひと言》

入会のご挨拶 合掌とともに

村田 譲



献血とソシアルダンスが趣味の村田と申します。今回入会する理由を考えると、斉藤征義さんのおかげ・ではなかろうかと思う下さい。

私は朗読が好きですが、詩の朗読イベントは少ないのです。しかし、短歌とか読み聞かせとか、ジャンルにこだわらなければ色々ある。でも、まったく知らない人ばかりというのもシャイな私としては気が引ける。そこで知ってる名前をググってみると、斉

藤征義という名前は高い頻度ででてきて、ポーランド文化協会もそのひとつでした。いざ会場に足を運ぶと、長屋さん、ムラサキさん、霜田さん、菅原さんなど知ってる名前が多い気が…(笑)。

ですから、ポーランドについては知らないことの方が多。まあ、WWII での国家分割からの不死鳥のような独立とか、スバルキギャップといわれる地政学の問題を抱えているとか、スタニスワフ・レムの惑星「ソラリス」での生きている惑星という発想が、地球をひとつの生命体と考えるイギリスのジェームズ・ラブロックが提唱した「ガイア仮説」と同じ匂いがするとか、その程度のイメージしか知らないです。そういうことで「ポーランド・ビギナー」入会です。まずはミウオシュ、そのときの『世界』から。

(むらた・じょう)

《新刊紹介》『コルチャックと「子どもの権利」の源流』塚本智宏著、子どもの未来社、2019.6

本書は、子どもの権利条約の精神的起源の一人として注目されてきたポーランドのヤヌシュ・コルチャック(1878~1942)の子どもの権利探究の過程の解明を目標として、筆者の習作『子どもの権利の尊重』(2004)を大幅に書き改めたものである。コルチャックは何を考えながら子どもの権利保障を、それもどんな権利保障を探求していたのか、現代の子ども福祉や教育などの問題に携わり、その権利の実現や前進を切望する人々にとって興味深い考察が行われている。

本書は、前著のあとに新たに視野を広げ、その背景にあったヨーロッパの子ども歴史やコルチャック以外の子ども権利史のパイオニアたちの思想や活動を描き出している。最近の国際的な子どもの権利史研究の動向にも触発されながら、コルチャックへの影響が見られるロシア革命時のヴェンツェリの思想や活動や、国際的な宣言・条約等の制度創設への直接的な足がかりとなった 1924 年ジュネーブ子どもの権利宣言の立役者イギリスの E・ジェブの活動や思想についての新たな知見を示し、当時の法律家、医者、教育家、社会福祉活動家が直面していた「子どもの権利」概念の多様な源流を発掘、紹介している。

本書は前著の後継書として、コルチャックのことを知りたいさまざまな初学者にとって手ごろな入門書ともなっている。コルチャックという人物を手短に知りたい人(⇒第 I 部第 1 章の 2)、アンジェイ・ワイダ監督の映画『コルチャック先生』で有名な



“最後の行進”に関心がある人(⇒第 I 部第 2 章)、コルチャックの子ども・教育思想についてコンパクトに知りたい人(⇒第 III 部第 3 章)、そしてコルチャックが書いた原典を読みたい人(⇒資料)など。

本書をテキストに、昨年刊行した『“子どもに”ではなく“子どもと”～コルチャック先生の子育て・教育メッセージ』(かりん舎)を参考書にして、勤務校で“アイデンティティと共生”という題目で、大人と子どもの共生を主題としてコルチャックの生涯と業績について講義を行った。ヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』で提起される人類愛の課題と若きコルチャックの隣人愛思想、レミゼの中の有名な少年、孤児ガヴローシュへの注目など…映画を引用しながら楽しい授業になった(少なくとも主観的には…)。

(塚本智宏、東海大学札幌キャンパス教授・本会会員)

【目次】

- 第 I 部 コルチャックとはだれか
 - 第 1 章 コルチャックの生涯と業績
 - 第 2 章 「最後の行進」伝説の虚像と実像
- 第 II 部 国際的な子どもの権利史の幕開け
 - 第 1 章 1924 年ジュネーブ宣言の成立と子どもの権利—E・ジェブと子どもの権利宣言
 - 第 2 章 ロシア革命とヴェンツェリの子ども権利宣言
- 第 III 部 コルチャックの子ども権利思想と実践
 - 第 1 章 “子ども=すでに人間”思想の誕生と発展
 - 第 2 章 子どもの権利思想と実践—探究のプロセス
 - 第 3 章 コルチャックと現代—コルチャックを読む
- 年譜 コルチャックの作品と生涯
- 資料 コルチャック『子どもの尊重される権利』1929
- 文献リスト

NHK《ラジオ深夜便》より

忘れられたノーベル賞学者ロートブラット

岡崎 恒夫

今年のノーベル生理学医学賞を京都大学の本庶佑先生が受賞しました。今から 23 年前にポーランドの物理学者がやはりノーベル賞を受けたことは実はポーランドでもあまり知られていません。今日は日本とも大いに関係のあるこのポーランド人ユゼフ・ロートブラット(1908～2005)についてお話します。

ロートブラットは 1908 年にワルシャワで荷馬車運送業者の息子として生まれました。小・中学校を経て職業学校で電気関係の技術を学び、後年ノーベル平和賞を受賞したレフ・ワレサ氏と同じ電気工として働いていました。しかし、勉学への思いが強く、高校卒業資格の要らないワルシャワ自由大学に入り物理学を修め、1938 年には現在のワルシャワ大学で博士号を取得しています。そのころ結婚した彼の妻トーラは第二次世界大戦中に強制収容所で彼の母親、弟妹とともに命を落としました。

彼は第二次世界大戦勃発前にイギリスに渡り、リバプール大学で研究をつづけました。戦後 1955 年に、20 世紀最大の哲学者と言われるバートランド・ラッセルが米国のアインシュタインや日本の湯川秀樹に呼びかけ、核兵器廃棄を唱えたラッセル＝アインシュタイン宣言を発表し、それを基に 1957 年カナダのパグウォッシュで科学者による平和を目的として立ち上げられたのがパグウォッシュ会議で、その創設者がロートブラットだったのです。

彼は第二次世界大戦中に英国の学者に誘われ米国の原子爆弾製造「マンハッタン計画」に参画しました。しかし、原子爆弾が出来上がる前に、ナチスドイツには原爆を作る能力がないことが分かった時、マンハッタン計画から離脱しました。彼はこの計画に参加した学者の中で唯一、途中で離脱した人としても知られています。第一次世界大戦と第二次世界大戦を経験したロートブラットは必ず第三次世界大戦が起き、その時には核戦争になると思い、それを止める手立ては平和運動しかないと考え、パグウォッシュ会議を立ち上げたのです。

社会とは無関係であり得ない科学者の道義的責任は重く、学問の結果が戦争で大量殺人に使われることは絶対に避けるべきだと、毎年世界各地で集まりを持ち、1976 年には第 25 回会議が京都でも開かれました。1954 年に米国がビキニ環礁で行った水素爆弾の実験のため日本の第五福竜丸が死の灰を浴びて、久保山愛吉さんが亡くなった事



件では、ロートブラットが死の灰のサンプルを取り寄せて調査した結果、危険区域外にいれば安全だとした米国の虚偽を暴露しました。

彼は自分の創設したパグウォッシュ会議とともに 1995 年にノーベル平和賞を受賞しました。ではなぜロートブラットはポーランドでもあまり知られていないのでしょうか。「私はイギリスのパスポートを持っているが、ポーランド人です」と言い続け、ノーベル賞授賞式の会場ではショパンの「ポロネーズ」を流すよう要請し、英国人の同僚にはしばしばポーランド最大の詩人ミツキエビチの言葉を引用したにもかかわらず、なぜポーランド国内ではほとんど顧みられなかったのでしょうか。一つは彼が鉄のカーテンの両方の政治家との間を核兵器廃棄の目的で取り持ったことによるのか(ゴルバチョフは彼を友人として遇した)、一時とはいえマンハッタン計画に参画していたことによるのか、1983 年に連帯労組委員長レフ・ワレサがノーベル平和賞をもらったことの陰になってしまったせいか、答えは誰もわかりません。

2013 年にノーベル平和賞受賞者をワルシャワに集めて行われた平和会議でもロートブラットの名前が挙がらなかったのは不思議というほかありません。(おかざき・つねお、ワルシャワ大学上級講師)

写真 ノーベル賞を受賞したロートブラット (1995)

<https://www.atomicheritage.org/profile/joseph-rotblat>

札幌国際芸術祭 <SIAF2020>

[テーマ] Of Roots and Clouds ここで生きようとする
(アイヌ語) シンリッ / ニシクル

会期：2020.12.19 (土) ～2021.2.14 (日)

この芸術祭の準備に WRO アートセンター(ポーランド・ヴロツワフ)のアグニエシュカ・クビツカ＝ジエドシエツカさん(企画ディレクター:メディアアート担当)とマグダレナ・クレイスさん(キュレーター:アートメディアーション担当)が参画しています。2019 年 7 月 27 日(土)札幌市資料館でお二人の案内で「ファミリー向けプログラム:Cześć (ちえしち=こんにちは)! ～ポーランドのアニメーションをたのしもう!」が催されました。(安藤厚)



**ポーランド
映画**

『COLD WAR あの歌、2つの心』に感動!

またしてもポーランド出身監督のレベルの高さに脱帽。音楽と舞踊でたどる冷戦史(1949～64年)&激しすぎる愛情物語。冷戦下を生き抜くため、ポーランド、パリ、旧ソ連圏諸国と舞台を移し、全編モノクロならではの美しい世界観が二人の心情を強く引き立て、劇中流れる曲「2つの心」は物語が進むにつれいろいろなバージョンに姿を変え心に染み忘れられない名曲になっていく…ズーラ(ヨアンナ・クリーク)、ヴィクトル(トマシュ・コット)役のリアルな演技には圧倒された。

監督はパヴェウ・パブリコフスキ。『イーダ』2013でポーランド映画界初の第87回アカデミー賞(2015)外国語映画賞を受賞した鬼才。

第91回アカデミー賞(2019)3部門(監督賞・撮影賞・外国語映画賞)にノミネート。第71回カンヌ国際映画祭(2018)で監督賞受賞。



※札幌シネマフロンティア 2019/7/26～8/1
※本作を鑑賞した会員の「座談会」を次号に掲載予定

氏間多伊子(うじま・たいこ)

2019年10月のイベント

《第33回定例総会&懇親会》豊平館、2019年10月12日(土)15:30～総会1F下の広間、17:30～懇親会2F広間(ポットラック形式)

入会・退会(敬称略、2019.6～9)

入会:小田晃孝、中條峰人、小島智代、エバ・コワルスカ、退会:秋田正恵

ご寄付ありがとうございます(敬称略)

(2019.5、1口千円) (1)北口久雄

会誌 POLE 定期購読制度

遠方にお住まいの非会員で会誌 POLE の定期購読をご希望の方には、1年(3号)に1,000円のご

寄付をお願いします。

新年度(2019.9～2020.8)会費納入のお願い

年会費(一般3,000円、学生1,500円)と、維持会費(任意のご寄付1口千円)の納入をお願いします。

【郵便振替口座】記号02740 5 番号19735

【加入者名】北海道ポーランド文化協会

または

[北洋銀行(本店営業部)普通預金口座]

[店番号]028[口座番号]0605084

[名義]ホッカイドウポーランドブンカキョウカイ

北海道ポーランド文化協会 会長 安藤厚

※ご請求額については、個別の納入お願い文書と郵便振替用紙を同封します。

目次

豊平館で第33回定例総会&懇親会(小笠原正明).....	1
〈後援〉二風谷アイヌ文化博物館特別展「1903年夏の平取～B・ピウスツキたちの短期調査より」(長田佳宏)・	2
〈後援〉講演と報告の集い「子どもの権利条約採択30周年によせて～日本とポーランド」(塚本智宏).....	2
《第91回例会》ポーランド名画ビデオ鑑賞会 2019-2『カティンの森』[報告とアンケート](園部真幸).....	3
《第90回例会》第9回「午後のポエジア」に参加して(嵩文彦).....	4
どこか懐かしいポーランド音楽(徳田貴子).....	4
私とポロネーズ(坂田朋優).....	5
ポーランド&ニッポン歳時記30(津田モニカ、ピョートル・ヴジェチョノ、霜田千代麿).....	5
《新会員のひと言》(村田譲).....	6
《新刊紹介》塚本智宏著『コルチャックと「子どもの権利」の源流』(塚本智宏).....	6
NHK《ラジオ深夜便》より 忘れられたノーベル賞学者ロートブラット(岡崎恒夫).....	7
札幌国際芸術祭(SIAF2020)ファミリー向けプログラム: Cześć(ちえしち=こんにちは)!(安藤厚).....	7
映画『COLD WAR あの歌、2つの心』に感動!(氏間多伊子).....	8
《ズビグニェフ・ヘルベルト詩集より》2(栗原成郎訳注).....	別冊1
Mrs. Mの語ったシヨパン(長屋のり子).....	別冊一

POLE

第98号 ポーレ編集委員会

氏間多伊子/熊谷敬子/塚本智宏/松山敏/ラファウ・ジェプカ

《ズビグニェフ・ヘルベルト詩集より》 2

栗原成郎訳注

母とその息子 Matka i jej synek

森のはずれの小屋の中で母親と息子が悠々自適の生活を送っていた。母子の愛は固かった。非常に。共に日没を眺めて過ごし、慣れ親しんだ歳月を育てていた。二人とも死にたくなかった。しかしママが死んだ。お母さんっ子は一人ぼっちになった。実際に、それは寝台の方角を向いた十分に古びた小さな絨毯(じゅうたん)だった。

(『ヘルメス、犬と星 Hermes, pies i gwiazda』より)

母 Matka

彼は彼女の膝から毛糸の巻き玉のように転げ落ちた。巻いた毛糸が急いでほどけて、やみくもに逃げだした。彼女は生命の初原を指のまわりに大切な指輪のように巻き付けて保った。守りたかったのだ。彼は急斜面を転がって何度か山に向かって登ろうとした。もつれた姿でたどり着こうとした。もはや決して彼女の膝の甘い玉座に帰ることはない。

差し伸べた手が闇の中に旧市街のように輝く。
(『パン・コギト Pan Cogito』より)

父をめぐる思索 Rozmyślania o ojcu

彼の顔は 幼年時代の大海原の上の黒雲の中にあって厳(いか)めしい
(それでぼくの暖かい頭を手の中に置くことは稀にしかなかった)

過失を容赦しないという信念をつらぬいた
なぜなら 森林を切り開き 小道を真っすぐに均(なら)し
ぼくらが夜に入ると ランタンを高く掲げて行ったからだ

ぼくは彼の右手に座って
共に光を闇から分離させ
ぼくら生ける者を裁くことを 考えた
—そうはならなかった

古道具屋の店員が手押し車に彼の玉座と
抵当証書 ぼくらの領土の地図を積んで運んだ

もう一度生まれた きわめて脆弱(ぜいじゃく)で小さな子が
透き通った皮膚 ほんのかすかな軟骨をもった子が
ぼくが受け容れることができるようにその体を縮小した

重要性のない場に石の下に影がある

彼自身がぼくの中で成長して自分たちの敗北を共に食らい
二人で大笑いする
和解する必要はほとんど無い
と人が言う時

(『パン・コギト Pan Cogito』より)

おばあちゃん Babcia

ぼくの最高に聖なるお祖母(ばあ)ちゃん
体にぴったり合った長いドレスを着ていた
無数の量の
ボタンで
留まった ドレス
蘭(らん)のように
群島のように
星座のように

彼女の膝の上に座ると
彼女はぼくのために話をしてくれる
全世界のことを
金曜日から
日曜日まで

話に聴き入って
ぼくはすべてのことを知っている—
—彼女の話から
話に出てこないのは彼女の出身のことだけ
お祖母ちゃんはバワバン[Balaban のろま]家出の
マリア
マリア・ドシフィヤッチナ[人生経験豊かな]

何も話してくれないのは
大量虐殺のこと
アルメニアの
トルコ人による虐殺のこと*

ぼくは数年間におよぶ幻覚から
のがれたくなっていた

彼女は知っている ぼくが待っていることを
そしてぼく自身が知っていることを
呪詛と悲嘆の言葉を除外して
言葉の
ざらざらした
表面と
底辺を

(『嵐のエピローグ Epilog burzy』より)

* 19世紀～20世紀初頭のオスマン帝国内のアルメニア人の強制移住・虐殺。詩人の祖母(父の母)はアルメニア人

黒い薔薇 Czarna róza

生成されたのは
黒色
失明した眼から
消石灰が原因で*

* wapno (石灰、消石灰)
は中世には魔術に用いら
れ、バルカンでは「吸血鬼」
退治に用いたようです。消
石灰は目に入ると失明する
と、危険視されていました。

空気に触れると
現れた
ダイヤモンドが
黒い薔薇が
惑星たちの混沌(カオス)の間に

空想の小さな牧笛を
吹きながら
導き出せ
黒い
薔薇を
色彩を
焼失した都市から
記憶を呼び出すように
堇(すみれ)色(いろ)を一毒物と大聖堂のために
赤色を一ピフテキと皇帝(カイゼル)のために
空色を一大時計のために
黄土色を一骨と大洋のために
緑色を一樹に変容した若い娘のために
白色を一白色のために

黒薔薇の中の
黒い薔薇よ
何を隠しているのか
死んだ電子の小蠅(こばえ)たちの間に
(『事物研究 Studium przedmiotu』より)

事物研究 Studium przedmiotu

1

最も美しいのは
存在しない事物

水運びには役立たず
英雄の遺骨の保管にも役立たない

アンティゴネーの胸に優しく抱(いだ)かれたこともない
その中には溝鼠(どぶねずみ)も溺れはしない

孔(あな)を持たず
全体が開かれている

あらゆる面から
観察される
つまり それは辛(かる)うじて
予感されるだけ

そのすべての線の
毛髪が
結び合わされて
光の一条(ひとすじ)の流れとなる

失明も
無く
死も
無い
存在しない事物
取り去られることはない

2

しるしを付けよ
存在しない
事物が占める場所に
黒い正方形のしるしで
それは成る
美しい不在者を悼む
単調な哀歌に

男の悲哀
四角形の中に
閉ざされた

3

今や
全空間が
大洋のように増水する

暴風雨が
黒い帆を激しく打つ
吹雪の翼が旋回する
黒い四角形の上に

そして島が沈没する
塩の増水の下に

4

今やあなたは持つ
真空の空間を
事物よりも美しい

事物の占める場所よりも美しい真空を
それは世界以前の場
あらゆる可能性の
白い楽園
あなたはそこへ入ることができる
叫ぶことができる
垂直面—水平面

垂直の電光が
裸の水平面を撃つ

われらはそこで満足することができる
そのようにあなたはすでに世界を創造したのだから

5

聴け 内なる眼の
忠言を

屈服するな
囁き 唸り声 舌打ちに
それは創造されざる世界
絵画の門の前で人々はひしめき合う所

天使たちが差し出す
薔薇色の雲の綿を

樹々がいたるところに
むさくるしい緑色の毛髪を挿し込む

王たちが紫を讃美し
喇叭手(らっぱしゅ)たちに命じる
金鍍金(きんめっき)をせよと

鯨でさえ肖像画を要求する

聴け 内なる眼の忠言を
誰も中に入れるなという

6

抽出せよ
存在しない
事物の影から
極地の空間から
内なる眼の切実な願望から
一脚の椅子を

美しくて無用なもの
原始林の中の大聖堂のよう

置け 椅子の上に
しわくちななテーブルクロスを
付け加えよ 秩序の理念に
冒険の理念を

信仰告白であらしめよ
水平面と格闘する垂直面の前で

天使たちよりも
穏和であれ
王たちよりも誇り高くあれ
鯨たちよりも実質的であれ
究極の物質の相貌(かお)を持って

われらは願う 表明せよ椅子を
内なる眼の眼底を
必然性の虹彩を
死の瞳孔を

(『事物研究 Studium przedmiotu』より)

事物たち Przedmioty

無生物の事物たちはつねに完璧無欠であって、不幸なことに、干渉し得るところは一点も無い。わたくしは椅子が脚を組み替えるのを一度も見たことがなく、寝台が後ろ脚で立つのを見たことがない。同様に、食卓は、たとえ疲れている時でも、あえて膝をつこうとはしない。事物たちは、わたくしたちの不安定性を絶えず諫めるために教育的な配慮からこのことをするのではないだろうか、とわたくしは思う。

(『ズビグニェフ・ヘルベルト 89 の詩
Zbigniew Herbert 89 wierszy』より)

ズビグニェフ・ヘルベルト(1924～98) ポーランドの詩人、エッセイスト、劇作家。第二次世界大戦中は国内軍のレジスタンス活動に参加。1950年代に詩を出版しはじめたが、間もなく自分の意思で政府公認の出版物に書くのをやめ、1980年代に主に地下出版で発表を再開。戦後ポーランドの反体制派詩人を代表し、最も有名で最も数多く(38ヶ国語に)翻訳された作家の一人で、何度もノーベル賞候補に挙げられた。1986～92年にはパリに住み「文学手帖」誌に寄稿。2008・2018年は政府・議会により「ヘルベルト年」と宣言され、2013年ズビグニェフ・ヘルベルト国際文学賞が設けられた。



(en.wikipedia より)

photo: Bohdan Majewski / Forum, 1974

Mrs. M の語ったシヨパン

長屋のり子

Mは輝く美しい頬をもつ女(ひと)

美しい胸と美しい脚をもつ女

果敢な潔い精神もつ女

五月三十日夕刻そのMから電話が掛かった。

私の海に向く部屋にはポリーニのシヨパンの「革命」が

流れていた。それにインスパイアーされてか、

「私、シヨパンが好きなの」Mの声がいきなり昂揚する。

以下はMのはつなつの昏れてゆく海の

さざ波に似た声が私に伝えた浸み入る迷懐…。

中学生の頃から学生時代はずっとジャズ一辺倒だった。

ローン・カーターのベース、

スタンゲッツのテナーサククス、

マルサリスのトランペット！

あの軽々としたジャズ！

即興演奏(インプロヴィゼーション)、

その場のひらめきが命の自由奔放なジャズメン！

私は、ジャズ喫茶に入りびたつた。

その後二十三才で結婚。夫の影響で知的で

構築的で斬新な音楽の方へ心が向くようになって…、

けれども三十二才で深刻な憂いによる離婚。

そのあとの六月、苦しい時期の苦しい夜、孤独な

私は朝里峠を、暗い夜道を横切つて、つん裂いて

身体を全身硬直させて、カペラで走つた。

自分の喘ぎが自分の耳底で響くほど苦しかった。

森は魔王の広げるところまでも不気味な大きな

黒いマントだった。霧が魔笛のようにふるえて

威嚇するように車に押しよせ、車を押し上げた。

恐怖に駆られて思わずカーステレオのポリウムを

マキシムにあげた。

その時に流れ出した曲がシヨパンだった。

「革命のエチュード」だった。

アルゲリッチだったか、リパッチイだったか、

いずれにしてもピアニストの指に翼が生えたような

鋭い凄打鍵だった。

音楽のもつあらゆるアスペクトが有機的に

叩き出されて私に迫つた。

あれは一瞬のうちに私が音楽と一体になる

奇蹟の瞬間だった。

シヨパンが力強い響きを立てて私を歓喜として襲つた。

満潮時の波の音だった。初夏の風に洗われた白い

高い波がうわつと立ち上がつて、まるごと私に

落ちてきた。海の塊がどさりと私に覆い被さつた。

まさに麻薬的なツイストで私をいきなり浄化した。

私の皮膚に「革命」がすべり込み

頬とこめかみにピリピリ電流が走つた。

私は朝里峠の頂上で車のすべての窓を開け放つた。

車の中に夜の透明がなだれ込んでそれを

胸いっぱい吸い込んで、私は涙がとまらなかつた。

私はいつまでもいつまでも声を上げて泣いた。

そうやって絶望の淵からシヨパンが私を救つたの。

シヨパンの「革命」の意識に私はびつたり重なつて、

身体の中に含まれ得る限りの。生の意欲が

もくもく疼き出したの。

ポジティブな生々とした感情を三十二才の私に

喚起させたの。

陰鬱な夜の森の空気さえその流れを変えた。

黒い不穏なマントが消えて、霧が消えて

私の苦痛が消えて、これから起こるだろうことへの

怖れも不安も、そして悔恨も全てが掻き消えていた。

高い音域のリズムの律動が始まると、

夜の森は音の向こう側のものまでひきよせて

甘やかな輝きをすらみせた。

私の心がやわらかになり、やさしく謙虚に

なつていくのが自分ではつきり感じられた。

対位法的にからみ合う、不具合な不幸な私の生の

流れをシヨパンの音楽が新鮮な息吹きとしてとめた。

私は音楽と暗黙の了解をした。夜眼に真白い

アカシアの深い森に向かつて開けた私の新しい道。

そのときからだわ、

あれからずっとシヨパンの静かな柔かなリズムの

うねりが私の意識の深部を打ちつづけている。

私はシヨパンと一緒に流れ溶けあっている。

あれから今日まで、私はそうやって生き、

明日からもきつとそうやって生きていく。

「私、シヨパンが好きなの」

シヨパンを聴いていると立ち上がってくる

エチュード「革命」の情景、そしてポロネーズ「英雄」

の情景、それが私を揺るがないものにする。

Mの声が紅潮して官能的に透きとおる。

眼下の石狩湾が夕陽に透かし出されて

冴え冴え燃え始める。

ほどなく七十才になるMの生きる意志が

冴え冴え燃えている。

POLE No. 98 (September 2019)

Newsletter of the Hokkaido-Poland Cultural Association

Table of Contents

33 rd Annual Meeting and reception at Hoheikan on Oct. 12, 2019 (M. Ogasawara)	1
Special Exhibition on B. Piłsudski at Nibutani Ainu Culture Museum in October-December 2019 (Y. Osada)	2
Lecture on the 30 th anniversary of the adoption of the Convention on the Rights of the Child: Japan and Poland – J. Korczak. at Sapporo-gakuin University on Nov. 14, 2019 (C. Tsukamoto)	2
Polish masterpiece video film viewing: “Katyń” by A.Wajda (M. Sonobe)	3
9 th poetry recitation “Afternoon Poesia” (F. Dake)	4
Nostalgic Polish music (T. Tokuda)	4
Polonaise and me (T. Sakata)	5
Haiku Yearbook: Poland & Japan 30 (Monika Tsuda, Piotr Wrzeciono and Ch. Simoda)	5
New member’s message (J. Murata)	6
(New Publication) “J. Korczak – An origin of the Rights of the Child” by C. Tsukamoto	6
Forgotten Nobel Prize scholar – Joseph Rotblat (T. Okazaki)	7
<Sapporo International Art Festival 2020 & WRO Art Center> Family program: Cześć (A. Ando)	7
New Polish film “COLD WAR” by Pawel Pawlikowski (T. Ujima)	8
Poems by Zbigniew Herbert 2 (translated by S. Kurihara)	Separate volume 1
A poem “Chopin as Mrs. M talked about” by N. Nagaya	Separate volume 1a